

## 幼児のもつ「こころの理論」について

— false belief 課題の検討より —

青木 弘 枝

### I 問題と目的

子ども、幼児は他者の行動を予測したり、他者の行動の理由づけをするとき、何を手がかりにするのだろうか。ある時期から子どもは他者に「こころ」を帰属し、そのこころと行動の関係についての理解をし、その理解に基づいて他者の行動を予測したり説明したりできるようになる。これは子どもが他者についての「こころの理論」をもつと考えられ、近年子どもの「こころの理論」の研究が盛んになっている。「こころの理論」は、Premack & Woodruff (1978) による「チンパンジーにもこころの理論はあるか」という研究で初めて用いられた概念である。そこではチンパンジーに人の行動を途中まで見せ、その後の行動を予測させる実験を行う。この実験では、チンパンジーは人の行動がこころで決定されると理解でき、人についての「こころの理論」をもつことが実証された。その後、「こころの理論」をめぐる、その意味や実験パラダイムについて哲学者の間で論争がおこった。中でも哲学者のDennet (1987) は「人が他者に心的状態(信念)を帰属させていることを示す最小限必要なパラダイムは、自分とは異なった信念を他者に帰属できるかを見ることである」という主張し、それをうけて、Wimmer & Perner (1987) は子どもに「こころの理論」があるか否かをみるために「false belief 課題」を考案した。その内容を以下に示す。

マキシという主人公がチョコレートを手元の戸棚に入れて外に遊びに行く。その間にお母さんがチョコレートを居間の戸棚から台所の戸棚に移してしまう。マキシが外出から戻り、チョコレートを食べようとする。そこで子どもはマキシがチョコレートをどこに探していくかと質問される。このとき子どもがマキシの false belief (マキシが現実にチョコレートがある場所とは異なった場所—マキシがチョコレートを最初においた場所—to チョコレートがあると信じる) に従ってマキシの行動を予測すれば、子どもは「こころの理論」をもっていると考えられた。この課題は多くの研究者によって追試されたが、どの研究もほぼ4歳で子どもが主人公の false belief を理解できると示した。

「false belief 課題」を用いた研究では、主人公の false belief を直接聞く質問と主人公の行動を聞く質問

のどちらかを用い、そのどちらも子どもが「false belief」を理解できているか否かをみるものと考えられている。だが、こうした質問の仕方による子どもの理解の違いは見られないだろうか？ 子どもが他者の「false belief」を理解することは、他者が自分の belief とは異なった false belief をもつと理解できることである。子どもが他者の行動を予測するには、さらに他者の false belief 理解以外の要因(他者がチョコレートをほしいと思っていることやチョコレートを見つけようという目的意識をもっていること)が理解できなければならない。他者の行動を予測するには false belief を理解することにプラス $\alpha$ の理解が必要であると予測できる。本研究では「false belief 課題」で、他者の false belief を理解することと他者の行動を予測することとの違いを検討することを目的とする。

### II 研究1

**目的** ; 従来の「false belief 課題」では、主人公の false belief を直接聞く質問 (Think question) とそれに基づいた主人公の行動について聞く質問 (Look question) がされた。先行研究では、これらは共に主人公の false belief の理解を見るものと考えられたが、本研究ではその2つの質問への回答の違いがみられると予測し、検討する。さらに、そうした違いが子どもの認知能力や環境要因の違いと関係するかを見る。

**被験児** ; 幼稚園児72名。年少児, 年中児, 年長児各24名。

**手続き** ; Perner (1987) による「false belief 課題」(チョコレートストーリーと絵本ストーリー) を人形劇によりビデオ撮影したものを子どもに見せ、Think question と Look question を呈示する。同時に、子どもの認知能力として精神年齢 MA を測り、環境要因としてきょうだい数による違いを見た。また、「false belief 課題」理解の前提である主人公の知覚経験、主人公がチョコレートの移動を見ているかいないかをきく質問 (See question) と主人公の行動の結果を見せた後、その行動の理由を聞く質問 (Reason question) をした。

**結果と考察** ; Think question に正答したが、Look question に正答できなかった子ども (主人公の false

beliefを理解しているが、行動の予測ができない子ども)は各学年を通して存在し、Think question, Look question共に正答している子どもと同様、学年の上昇と共に増加した。こうした子どものMAの平均やきょうだい数はThink question, Look questionに正答できた子どものそれとかわりはなかった。またSee questionやReason questionへの正答はThink question, Look question共に正答した子どもに比べて少なかった。これらの結果より、false beliefが理解できてそれに基づいた行動を予想できない子どもは存在したが、認知能力や環境要因との関連は少なかった。このことから、課題呈示上の問題が考えられた。研究2ではこうした疑いを確かめるために課題の内容や呈示方法を子どもにより分かりやすく改良した(行動の予測の質問を言葉で答えさせるだけでなく、人形を使って答えさせるものを追加した)。

### Ⅲ 研究2

**目的;** 研究1よりも課題の内容や呈示の仕方を分かりやすいものにした。それでもfalse beliefに正答できるが、行動の予測に正答できない子どもが存在するかを検討する。さらに、よりわかりやすい行動の予測の質問を加えることで、行動の予測への正答数が増加するか検討する。

**被験児;** 幼稚園児84名。年少児22名、年中児60名、年長児2名、これを年少群22名、年中群33名、年長児29名。

**手続き;** 研究1の課題とほぼ同じ構造の課題(チョコレートストーリーとおもちゃストーリー)を子どもに呈示する。呈示の仕方は研究1と異なり、子どもの前で実際に人形劇を実演する。研究1のビデオテープによる呈示では、そのスピードについていけないため課題の内容が理解できず、正答できない子どもいると考えられたので実演の方法に変えた。その後子どもに、Think question, Look question, それに加えてMove question(主人公の行動を人形を使って子どもに示させる)を呈示する。また、See question, Reason questionとそれに加えて主人公がチョコレートの移動を知っているかという知識について聞く質問(Know question)を呈示し、Think question, Look questionの正誤との関連を見る。

**結果と考察;** 研究1の結果と比べ、false beliefは理解できても行動の予測はできないという子どもはかなり

少なかった。ただその逆、行動の予測はできても主人公のfalse beliefを理解できるという子どもはいなかった。行動の予測を人形で示させる質問は従来の言葉による行動の質問よりも正答者は多かったが、false beliefの理解を見る質問よりも正答者は少なかった。こうした結果からfalse beliefが理解できてもその行動の予測はできないという子どもが発達の過程に存在し、その子どもは他者のfalse beliefを理解し、それに基づき行動の予測ができるという順序で理解していくと考えられる。ただ子どもがこうした順序で発達の過程をたどるとしても、その時期は非常に短いか、もしくはすべての子どもがそうした発達の過程をたどらず、ある一部の子どもがその過程をたどると思われる。大部分の子どもは他者のfalse beliefを理解することと行動の予測をすることはほぼ同時にできるのかもしれない。また、false beliefの理解を見る質問や行動を予測させる質問に正答できている子どものほとんどはSee question, Know questionの両方に正答できた。このことから主人公の知覚経験やチョコレート移動の知識について理解していることはfalse beliefの理解やそれに基づく行動の予測の必要条件であるといえる。行動の理由をきく質問ではfalse beliefの理解と行動の予測の両方に正答できた子どもがすべて主人公のこころと行動の因果関係を理解した回答ができたわけではなかった。行動の理由づけを言葉で説明することはfalse beliefの理解やその行動の予測とは別の言語による説明能力が必要ではと考えられる。

### Ⅳ 総合的考察

研究1の結果から、彼らが行動を予測できないのは認知的能力や環境要因による違いというよりも、課題呈示上の問題ではと考えられた。研究2では、そうした疑いを確かめるために課題を修正したが、なお少数だが依然としてfalse beliefが理解できてもその行動の予測できない子どもが存在した。これらの結果から、false beliefが理解できてもその行動が予測できない状態は、false belief理解と行動の予測が共にできる以前に存在すると考えられる。今後の課題として、他者のfalse beliefが理解できず、行動の予測もできない子どもを縦断的に観察して、false beliefの理解ができその行動を予測することができない過程をどのくらいの子どもの子がむか探る研究が必要である。